

稲畑汀子の滑稽俳句（3）

小西昭夫

稲畑汀子（敬称略）の句集『風の庭』の滑稽俳句を紹介するのも今回は最後である。まだまだたくさんの滑稽俳句があるが、紙幅の許す範囲で見たいこう。

汗をかき切つてどうしてもよくなりし

この句もあるある感満載である。一生懸命何かをして汗をかいた。汗をかき切ったのだから炎天下の作業かもしれない。作業の途中では、終わったらすぐにシャワーを浴びてとかいろいろ考えたが、汗をかき切って仕事をやり終え放心状態なのだろう。もうどうしてもよくなったのである。笑える。

夜店抜け機嫌直つてをりにけり

夜店を抜けて機嫌が直ったのは、自分か子どもかは分からないが、夜店の華やぎを抜けたことで機嫌が直ったのだ。欲しいものを買ったのかもしれないし、夜店のお兄さんが面白いことを言ったのかもしれない。人間の機嫌はこんなにも簡単に直るのだと思うと可笑しい。

仕事とは別の顔して顔見世に

歌舞伎を見るのは庶民の大きな楽しみである。この日ばかりは着飾って出かけ、幕の内弁当を楽しむ。同じ様に着飾って外出しても、仕事だと厳しい顔をしているのだろう。今日は年に一度の顔見世である。仕事とは別の顔をして、最員の役者のことを考えている。無防備な顔をしているのだ。よく分かるなあ。

雪女よりも化粧の濃き女

もう笑ってしまう。雪女も化粧をするのだろうかと思うと余計に可笑しい。一時、美白の女王と呼ばれた鈴木その子さんを思い出す。鈴木さんの化粧は一度

見たら忘れられない白さだった。不気味とも言っていいくらいの白さだったが、この句のモデルの女性は鈴木さんを超えていたのだろうか。

水引きの目立たぬ花の目立ちけり

確かに、水引草は派手ではないので目立たない。その目立たない花が目立つとは、水引草の一茎だけを切って活けたのだろうか。普段は目立たないものが目立つ面白さ。

家出せし話は春の猫のこと

えっ！ 家出。大変だと思ったら、それは猫のこと。落ちを聞いて一安心。しかも春の猫である。つまりは恋猫である。家出して当然かも。

稲畑汀子は、日本伝統俳句協会を立ち上げ、虚子記念館を作り、「ホトトギス」三代目主宰を継承した人物だが、『風の庭』にはユーモラスな句がとて多い。ページをめくるたびに滑稽句に出会う。これまでとは違う特別な句集である。

平成二十五年に、「ホトトギス」を息子の廣太郎に譲っているが、汀子の肩の荷を下ろした軽やかさが詰まっている句集が、この『風の庭』なのではないかと思う。